

構築方法を示すものとして03があげられる。長軸方向の断面が右と左で段差がついているものである。青森県沖附(2)遺跡^(註4)で「未完成の溝状ピット」の可能性のあるものとして報告されている例は、両側を同時に掘り下げて完成する過程を示している。本遺構の場合、①両側をある程度掘り下げたあと片側ずつ掘り切る、②片側だけを掘り切ってから残りを掘る、③この形で完成の状態、の3つの可能性が考えられる。本遺跡における他の陥し穴の例から見て③は削除されるであろう。溝状ピットの形態が細長く深いという物理的に非常に掘りにくいという点から考えにくい。本遺構の場合、①の途中で構築作業が放棄されたものと解釈したい。

調査区から検出された溝状ピットのうち、なんらかの可能性が推定できるものは、以上の3基であった。遺構の性格上、構築、廃絶年代を確定する手掛かりに乏しいため、今回の調査では埋土の土壌分析の必要性を痛感させられた。

中世における石神遺跡について (第21図)

石神遺跡は、地形及び空堀の存在から中世の城館のひとつとされている。調査の結果、空堀のほかに中世に属すると思われる遺構及び遺物が皆無という状況であった。ここでは、以下の諸点から遺跡の性格に迫ってみたいと考える。すなわち、(a)歴史的環境、(b)地理的環境、(c)地元に残る伝承、(d)調査で得られた知見の4点である。

(a)歴史的環境

大曲市と南外村を分ける低山地上には、本遺跡のほか六郎沢館、大向館、薬師堂館など中世の城館が分布している。大向館と薬師堂館は大曲市から本荘市へ抜ける道をはさむように位置している。一方、その道沿いにある中山集落から分かれて檜岡に抜ける道と小出川をはさむように六郎沢館と本遺跡が位置している。直線距離にして1kmである。六郎沢館は、標高120mほどの山の上にあり、30m×23mの主郭とそれを取り囲むように土塁と帯郭が配され、北側に空堀を有する。大曲方面からの敵の侵入を警戒するか、くい止める役目をもっていたと推定されて^(註5)いる。また、本遺跡の南約200mの小山に神社が祭られている。これには観音様が祭られ、毎年4月23日に祭礼が行なわれるという。神社の石燈籠には、文政13(1830)年という文字が彫られている。今回発掘調査した部分は、昭和20年前後に開墾が行なわれている。

(b)地理的環境

南南東から北北東に蛇行して流れる小出川と、東北東から西南西に向かって流れ小出川と合流する中山深山沢とによって開析され、半島状に水田に突き出ている低山地の上に本遺跡は立地する。その山の裾をまわるように市道大畑線が通っている。遺跡からは、南の中山方面、西の六郎沢館、北の檜岡方面への眺望がたいへん良い。また、中山深山沢は水量の豊富な清流であるため、生活用水のほか水田耕作に利用されている。このあたりの水田は、いわゆる谷津田

であるため水稻の収量はやや落ちるものの、きれいな沢水がおいしい米を作られている。沢水は深山地区のほかに西村地区にも引かれており、小出川の水の利用度は低い傾向にある。

(c) 地元に残る伝承

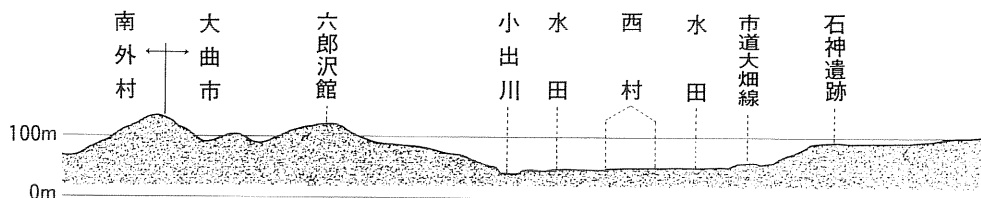
本遺跡の立地する山を、地元の人は「館の山」と呼びならわしており、水田をめぐって小出川の向こうの山(六郎沢館と推定される)との間で争いがあったこと。また、「館の山」側で橋岡方面に行く場合に、小出川沿いの道を通ると六郎沢館のほうに知られてしまうので、逆に深山沢のほうの山道を利用したという伝承を聞くことができた。

(d) 調査で得られた知見

今回の調査で中世城館に関係する遺構と考えられたものは、南側斜面に段々畑状に造成されたものと空堀である。前者は、斜面部に土を階段状に盛り上げて、5～6段の平坦面を作り出しているものであった。当初は郭でないかと推定されたが、戦後につくられた段々畑であることが判明した。後者の空堀は、東側から入っている小さい尾根の南側にそれと平行するように位置している。等高線とはほぼ直交する関係にある。台地の端から端を貫いてひとつの区画面をつくるといったものでなく、堀の西端はガラガラと立ち上がり、自然の地形に吸収されてしまっている。東側については、次第に浅くなっていっているのが観察され、調査区外で自然地形に吸収されてしまうものと推定される。しかし、そのさらに東側に尾根に沿って幅5～7mの空堀状の落ち込みが完全に埋まりきらずに続いているのが現地を歩いてみてわかった。断面観察は3箇所で行ったが、付図断面図からわかるように、自然営力による変形を受けている。すなわち、空堀の南側(右)の壁は崩落によってオーバーハングしており、北側(左)の壁は雨水等の侵食によって削られ、緩い傾斜で立ち上がる。このことは、空堀が等高線に直交してつくられ、かつ北側に尾根があるという地形の影響であろう。3箇所の断面図のうちC-Dの断面図をみると、他の断面より原形を比較的良くとどめていることがわかる。これによると、本来の断面形は逆台形を呈していたことが推測できる。

以上4点について述べてきたが、(a)～(c)については相互に関連を有し、本遺跡が館として最適の立地であり、水の豊富な水田をめぐり争い合ったということは容易にうなずけるものであろう。(d)からは、空堀が尾根側からの自然営力により変形を受けていること。さらに調査区外東側に空堀が断続しながら続いていることが明らかになった。

ここでは、以上の点をふまえて次のように考える。調査区は、石神遺跡の西の端にあたること。今回調査された空堀のさらに東側に空堀らしい落ち込みが観察されたことなどから、館の主郭部分は調査区の東側の尾根上にあるのではないかと推定される。これは第21図から明らかに、標高120mにある六郎沢館から標高80mの本遺跡の西の端が手に取るように見えることから、十分考えられるものと思われる。



第20図 石神遺跡・六郎沢館立地関係図 (1:5000)

- (註1) 田村壮一 「陥し穴状遺構の形態と時期について」 『紀要』 VII 助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987(昭和62年) P.25
- (註2) 霧ヶ丘遺跡調査団 『霧ヶ丘』 武蔵野美術大学考古学研究会 1973(昭和48年)
- (註3) 青森県教育委員会 『牛ヶ沢(3)遺跡』 青森県文化財調査報告書第86集 1984(昭和59年) P.215
- (註4) 青森県教育委員会 『沖附(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集 1986(昭和61年) P.214
- (註5) 長山幹丸 『南外村の城と館』 南外村郷土史資料 1987(昭和62年) P.47

参考文献

- 青森県教育委員会 『発茶沢』 青森県埋蔵文化財調査報告書第67集 1982(昭和57年)
- 青森県教育委員会 『石ノ窪(1)・石ノ窪(2)・古宮遺跡発掘調査報告書』 東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅹ 青森県埋蔵文化財調査報告書第92集 1983(昭和58年)
- 八戸市教育委員会 『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集 1982(昭和57年)
- 福田友之 「溝状ピット研究に関する覚書」 『弘前大学考古学研究』 第1号 弘前大学考古学研究会 1981(昭和56年)
- (助)岩手県埋蔵文化財センター 『雫石町 下平遺跡 高校西遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第14集 1978(昭和53年)
- (助)岩手県埋蔵文化財センター 『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 安代町荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集
- 西本豊弘 「狩猟・漁撈の場と遺跡」 『季刊考古学』 第7号 雄山閣 1984(昭和59年)
- 今村啓璽 「陥し穴(おとし穴)」 『縄文文化の研究』 2 雄山閣 1983(昭和58年)

第2表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表									
遺跡名	所在地	立 地	時 代	陥し穴検出基数			文 献		
				A型	B型	C型			
北の林Ⅰ	鹿角市	丘陵地の緩斜面	縄文・平安	16	—	—	秋田県教育委員会：東北縦貫道報告書Ⅲ	県報文第89集	1981(昭和56年)
北の林Ⅱ	〃	舌状台地上	縄文	21	—	—	〃	Ⅳ 県報文第90集	〃 (〃)
猿ヶ平Ⅰ	〃	段丘上の緩斜面	縄文・弥生	1	—	—	〃	Ⅴ 県報文第91集	1982(昭和57年)
柏木森	〃	丘陵地の緩斜面	縄文～古代	1	—	—	〃	Ⅶ 県報文第105集	〃 (〃)
中の崎	〃	舌状台地縁辺部	縄文～平安	1	—	—	〃	Ⅶ 県報文第105集	〃 (〃)
妻の神Ⅲ	〃	丘陵地の緩斜面	縄文～中世	13	—	—	〃	Ⅸ 県報文第108集	1984(昭和59年)
下乳牛	〃	〃	縄文・平安	1	—	—	〃	Ⅺ 県報文第119集	〃 (〃)
案内Ⅵ	〃	〃	縄文～平安	1	—	—	〃	：田山・花輪線報告書 県報文第115集	〃 (〃)
高市向館	〃	〃	平安・中世	2	—	—	鹿角市教育委員会：鹿角市文化財調査資料22		1982(昭和57年)
はりま館	小坂町	〃	縄文～平安	14	—	—	秋田県教育委員会：東北縦貫道報告書Ⅹ	県報文第109集	1984(昭和59年)
大岱Ⅰ	〃	〃	縄文・弥生	2	—	—	〃	Ⅹ 県報文第109集	〃 (〃)
白長根館Ⅰ	〃	河岸段丘縁辺部	縄文・平安	7	—	—	〃	Ⅺ 県報文第120集	〃 (〃)
蔦ヶ長根Ⅳ	大館市	舌状台地上	縄文・弥生	1	—	—	〃	：103号バイパス報告書 県報文第84集	1981(昭和56年)
藤 株	鷹巣町	河岸段丘縁辺部	縄文	2	—	—	秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』	県報文第85集	1981(昭和56年)
土 井	八森町	〃	旧石器～中世	2	—	—	〃	『土井遺跡発掘調査報告書』 県報文第111集	1984(昭和59年)
中 田 面	峰浜村	〃	縄文～中世	5	—	—	〃	『中田面・重兵衛Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡』 県報文第74集	1980(昭和55年)
館の下Ⅰ	能代市	舌状台地上	旧石器・縄文	1	—	—	〃	『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 県報文第62集	1979(昭和54年)
腹鞆の沢	〃	河岸段丘縁辺部	縄文・平安	10	—	—	〃	『腹鞆の沢・桐木田・蒲沼遺跡概報』 県報文第94集	1982(昭和57年)
上ノ山Ⅱ	〃	平坦部	縄文・平安・中世	2	—	—	〃	『上ノ山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』 県報文第137集	1986(昭和61年)
大畑台	男鹿市	段丘上の平坦部	縄文	2	—	—	日本鉱業株式会社船川製油所『大畑台遺跡発掘調査報告書』		1979(昭和54年)
三十刈	〃	丘陵地の緩斜面	縄文～平安	2	—	2	秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』	県報文第110集	1984(昭和59年)
下堤C	秋田市	台地上の平坦部	縄文～平安	1	—	—	秋田市教育委員会『秋田新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』		1987(昭和62年)
〃 D	〃	〃	旧石器・縄文・古代	2	—	—	〃		1982(昭和57年)
湯ノ沢F	〃	〃	平安	1	—	—	〃	『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』	1984(昭和59年)
松木台Ⅲ	河辺町	〃	旧石器・縄文・平安	15	—	—	秋田県教育委員会『東北横断道報告書Ⅰ』	県報文第150集	1988(昭和63年)
石坂台Ⅳ	河辺町	台地上の平坦部	縄文	1	—	3	秋田県教育委員会『東北横断道報告書Ⅰ』	県報文第150集	1988(昭和63年)
石坂台Ⅴ	〃	〃	縄文・弥生	1	—	—	〃	『 〃 Ⅰ』 〃	〃 (〃)
上ノ山Ⅱ	協和町	段丘上の平坦部	縄文	6	—	—	〃	『東北横断道報告書Ⅱ』 県報文第166集	〃 (〃)
館 野	〃	〃	縄文	1	—	—	〃	『 〃 Ⅱ』 〃	〃 (〃)
下岩ノ沢	仁賀保町	〃	縄文・平安	1	—	—	仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』		1986(昭和61年)
福 田	能代市	台地上	縄文・平安	1	—	—	秋田県教育委員会『八竜能代道路報告書Ⅱ』	県報文第178集	1989(平成元年)
石 丁	〃	〃	縄文	2	—	—	〃	『 〃 Ⅱ』 〃	〃 (〃)
十二林	〃	台地平坦部、緩斜面	縄文～平安・近世	8	—	—	〃	『 〃 Ⅱ』 〃	〃 (〃)
半 仙	協和町	丘陵地の緩斜面	縄文・弥生	3	—	5	〃	『東北横断道報告書Ⅲ』 県報文第180集	1989(平成元年)
太田谷地館	鹿角市	台地平坦部	縄文～平安	—	—	3	〃	『西山農免農道報告書Ⅴ』 県報文第183集	1989(平成元年)

文献の項の正式名称は、次のとおりである。

東北縦貫道報告書	⇒ 東北縦貫自動車道発掘調査報告書
田山・花輪線報告書	県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書
中田面・重兵衛Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡	中田面遺跡・重兵衛Ⅰ・Ⅱ遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書
103号バイパス報告書	国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書
腹鞆の沢・桐木田・蒲沼遺跡概報	腹鞆の沢遺跡・桐木田遺跡・蒲沼遺跡発掘調査概報
東北横断道報告書	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書
八竜能代道路報告書	一般国道7号八竜能代道路埋蔵文化財発掘調査報告書
西山農免農道報告書	西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書